

自由16

ニホンザル、アカゲザル、カニクイザルの繁殖現象の種間比較
光永総子（京都大・霊長類・器官調節）

京都大学霊長類研究所のニホンザルについて観察及び生殖関連ホルモン分析を行い、メスの授乳による性腺機能、発情回帰の抑制を調べた。また、同研究所で全く同じ条件で飼育されている放飼場のニホンザル3グループ、アカゲザル3グループにおける過去10年にわたる出産記録から出産日、出産間隔を分析した。その結果ニホンザルの方がアカゲザルよりも隔年出産の傾向が強く、そのため平均出産間隔が長いことが確かめられた。このような近縁種間の出産間隔の違いをもたらす要因のひとつとして、繁殖季節性の強度の差が示唆された。すなわち、ニホンザルの方が出産季における出産日の分布が小さく、受胎できる時期がアカゲザルよりも限られているらしいことが判った。つまり、ニホンザルでは、比較的短いその種の繁殖季（性腺が活性化する時期）の終わりまでに性腺機能を回帰しなかった授乳メスは受胎しにくいと言える。授乳ニホンザルメスがその次の繁殖季に性腺機能を回帰しない要因として、ニホンザルにおける授乳による性腺機能抑制の強さ、或いは授乳期間の長さが考えられる。このふたつのうちどちらが、或いはどちらも要因となっているのかを検証するため、授乳メスの生殖関連ホルモン動態と、離乳の様相及び授乳期間の種間比較を行う必要がある。通年繁殖をすることが知られている同じマカカ属サルであるカニクイザルも加え、前述2種とあわせ3種のマカカ属サルの授乳特性と出産間隔の関連性について研究継続中である。

自由17

輸送したサル卵巣からの卵子の採取性と成熟能
塩谷康生、細江実佐（農水省・畜試）、清水慶子（京都大・霊長類・分子生理）

サル、卵巣、輸送、卵子、体外成熟

輸送したサル卵巣からの卵子の採取性
塩谷康生、細江実佐（農水省・畜試）、清水慶子（京都大・霊長類・分子生理）

霊長類研究所で実験殺されたサルから卵巣を摘出し、魔法瓶中に保温し、茨城県筑波まで輸送し、卵子を採取し、その採取性や体外での成熟能を検討した。

摘出卵巣を通常のトラック輸送便に託すことによって、翌日8時あるいは10時までに筑波に輸送できた。その際にステンレス製の魔法びんでは翌朝10時までに26℃以下になることがわかった。その解決法として大きな魔法びんに小型の魔法びんを入れることによって、温度の低下が30℃にとどまることが明らかになった。

ニホンザル（2.5才、体重5.6kg）から普通サイズの卵子21個、小型の卵子が19個が得られた。普通サイズの卵子を24時間成熟培養した結果、卵核胞崩壊から第1減数分裂中期の卵子は検査卵15中3個で、残りは卵核胞期であった。

生後1カ月齢のニホンザルからは1個の卵子しか採取できなかった。この卵子は成熟培養を行ったが、卵核胞にとどまり成熟しなかった。

ニホンザルからの卵子の採取性を2年間のデータでとりまとめた。

年齢	体重	採取卵数
2.5	4.0kg	92
2.5	5.6	30
0.5	1.1	14
0.01		1

長距離輸送した卵巣から卵子を採取して研究材料に用いることの可能性が示された。